

六花の輝き

<教育目標>

喜んで登校し、
生き生きと学ぶ子ども

〒943-0805 上越市木田3-1-25

TEL 025-523-3858 FAX 025-525-7188

E-mail takashi@jorne.or.jp

どうやって褒めたら・・・

校長 遠藤和英

先日、ある研修会で、「子どもたちは褒めると伸びるのは何となく分かるのですが、具体的にどんなふうに褒めるといいのかわかりません。褒め方について話をしてください。」と言われたことがありました。確かに、子どもたちの様子を見てみると、叱らなければならないことはすぐに目につくのに、褒めることはなかなか目につかないものです。褒めることは意外と難しいと思います。最も基本的な褒め方は、今できていることを褒めることです。例えば元気のよい挨拶をしている子に、「気持ちのいい挨拶だね。」ということです。でも、実際にやってみようすると、「今、できていること」を見つけるのさえ難しいことがあります。また、「できていないことをできるようにしたいのだから、褒めることはできない」という考えもあります。上手に褒めることは、本当に難しいです。

そんなときにお勧めの方法は、「まだ、できていないことでも褒める」ことだそうです。たとえば、「〇〇は優しい子ね」「〇〇はゲームの時間をきちんと守れる子ね」・・・などという具合です。今は、できていなくてもいいから、どんどん褒める。言い換えると、「できる前から勲章を与える」「よいレッテルを貼る」ということです。不思議とこの方法で、子どもは徐々に変わっていきます。人間は、自分についてよい評価が与えられると、その評価を裏切らない行動をとるようになっていくものです。だから、まだできていないことでも、どんどん褒めてください。「よく頑張っているね」「きっとたくさん漢字が書けるようになるよ」・・・もし「そんなことないよ!」と子どもに言われても「私はそう思っている」と言ってあげてください。

また、子どもに直接は言いにくいという場合もあるかもしれません。そんなときは、他の人の前で褒めるとよいそうです。子どもに聞こえるように、先生の前で、あるいは家族の前で褒めてみてください。それを聞いた子どもは、「そんなふうに見えてくれたんだ」と意気に感じ、きっと期待を裏切らない行動をとるようになります。

人間にとって褒められることは快感です。だから、また快感を得たいという動機から、同じ行動をとるようになります。そして、それを繰り返すことで、再度快感を得ようと、「もっともっと」と同じ行動がしたくなります。短期的には子どもを叱る方が目に見えた効果が得られるかもしれませんが、長い目で見ると、時間はかかりますが褒める方が子どものやる気を呼び起こし、自主的な行動を促すことができます。褒めることは、子どもを成長させるために大切だと思います。

「できていることを褒める」ことは、結構難しいかもしれませんが、でも、「まだ、できていないことでも褒める」「他の人の前でも褒める」ことなら、できそうではありませんか。私も学校で、きっと効果があることを信じて取り組んでいます。子どもを自然に、そしてあたり前に褒められると素敵ですね。

高志小学校ABCD

A:あたり前のことを

B:ばかにしないで

C:ちゃんとできる人が

D:できる人(すごい人)

○御 礼

毎週金曜日、地域と保護者の有志の方が、学校内の手すりやドアなど、子どもたちがよく触る部分の消毒作業をしてくださっています。19日の金曜日にもボランティアとして参加してくださった方々が、それぞれに分担して消毒作業を進めてくださいました。おかげさまで、皆様が作業をしている間、私たち職員は会議をしたり、どのように授業を進めていくか考えたり学年内の打ち合わせをしたりする時間に充てることができています。皆様のご協力のおかげで、学校が効率よくいつもの活動をしていくことができ、ありがたさを感じております。ご協力、本当にありがとうございます。

○知っていてください

学校は、子どもたちが集団で生活する場ですから、いろいろなことがあります。楽しく学習したり遊んだりできる毎日ばかりだとよいのですが、ときには嫌なことがある場合もあります。

例えばこんなことがありました。

- ・下駄箱の脇に「バカ」と書かれてた。
- ・体育館のトイレに、不適切な言葉が書かれていた。
- ・3階音楽室脇のトイレの鍵を、何回もわざと内側から閉めるいたずらがあった。
- ・ランドセルカバーに「しね」と書かれていた。

まずは、誰がやったかを特定して指導するために、何か知っている人は教えてくださいなどと子どもたちに呼びかけ、該当者を指導します。（残念ですが、しっかり特定できることは多くはありません。）同時に、多くの子どもたちに社会性を伸ばす機会として、その学年や全校の子どもたちに事実を知らせ、何かいけないのか、相手がある場合は相手の気持ちを想像させ、どうしていかなければならないかを考えさせる機会を設定しています。

また、友達と適切な人間関係を築くことができずに、同じ子ども同士で何回もけんかなどのトラブルが発生するときもあります。これについても、相手の気持ちを想像させ、何がいけないのか考えさせ、どうしていかなければならないのかを指導しています。

これらのことは、一度指導したからといって、すぐになくなるわけではありません。時間が経つと、あるいは指導した次の日に繰り返される場合もあります。そんなときは、教員も人間ですから、正直、無力感に苛まれる場合もあります。でも、あきらめることは許されません。学校が基本的に楽しく安全な場であることは、子どもたちにとって必要不可欠です。悲しんでいる子が出ないよう、また、子どもたちの社会性の一層の伸長を信じて、何度も何度も、繰り返し繰り返し指導を行っています。併せて、今月は、子どもたちの様子を明確に把握するために、生活アンケートをもとに教育相談を行っています。今後も、悲しんでいる子どもを見逃さないように努めていきますし、私たちには知り得ないような情報がありましたら、どうぞ教えてください。

最後になりますが、社会性を伸ばすのは、学校だけではできません。保護者の皆様には、学校は集団生活の場であるから、楽しいことばかりではなく嫌なことがある場合もあるということを知っていてください。また、お子さんの社会性を伸ばすためにも、このようなことがあった時、どのようにしていったらよいのかをご家庭でも話題にしてみてください。どの子も「被害者」にも「加害者」にも成り得ますから。